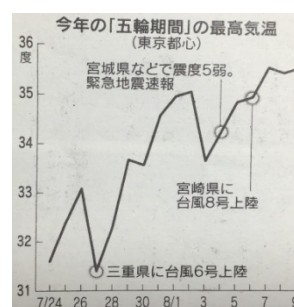


## 東京五輪の気象リスク

台風 10 号のあとも猛暑が続く。来年の東京五輪・パラリンピックのことを考えた。日経新聞 8 月 10 日朝刊「五輪期間の気象リスク浮き彫り」を紹介したい。

2020 年東京五輪は 7 月 24 日の開会式で幕を開け、8 月 9 日の閉会式でフィナーレを迎える。今年の「大会期間」17 日間を振り返ると、猛暑や台風など、真夏の五輪が抱える気象リスクが改めて浮き彫りになった。世界から選手、観客を迎える本番に向けて、さらなる備えが求められる。

今年の 7 月 24 日～8 月 9 日、都心では最高気温 35 度以上の「猛暑日」が 6 日あり、他の日も全て 30 度以上の「真夏日」だった。湿度や日射などの熱環境も加味して環境省が公表している「暑さ指数」(WBGT) でみると、「運動は原則中止」とされる 31 度以上の日は 17 日間のうち 14 日、8 割を占めた。



7 月 24 日～28 日に潮風公園 (東京・品川) で開かれたビーチバレーのテスト大会の会場では、25 日正午すぎに暑さ指数 32.1 度を計測した。大会中に 7 人が救護所を訪れ、うち 4 人が熱中症の症状を訴えた。「本番はさらに多くの人を観戦に訪れる。救護所を広くするなど対応を考えなければ」と都の担当者は話す。暑さを考慮して男女のマラソンのスタートは早朝午前 6 時だったが、陸上でも 400 ㌢ハードルや 1500 ㌢の予選などは昼間に行われる。

大会組織委員会はミストシャワーの設置、保冷剤の配布などの暑さ対策を予定しているが、熱中症予防に詳しい国立環境研究所の小野雅司・客員研究員は「運営側の対策だけでは限界がある。観客自身も体調に気を配ることが重要」と話す。

7 月 27 日には台風 6 号が三重県に上陸、8 月 6 日には 8 号が宮崎市付近に上陸した。16～18 年の記録では、年間の台風発生数 (26～29 個) の 6～7 割が五輪とパラリンピックのある 7～9 月に集中している。日本に上陸した計 15 個のうち 14 個がこの 3 カ月だった。波や風など天候の影響を受けやすいサーフィンなどは、もともと競技日程に余裕を持たせてある。ただ、台風が東京に接近するとなれば交通機関などに影響が出る恐れがあり、屋内の競技でも時間・日程の変更はあり得る。「直撃も想定してシミュレーションしている」(大会関係者)

8 月 4 日夜に宮城県などで震度 5 弱を観測した地震で気象庁は緊急地震速報を出し、東京でも流れた。「試合会場でいきなりあちこちのスマホからサイレン音が鳴り始めたら、パニックになる外国人も出かねない」と同庁の担当者は危惧する。

こんな時期に五輪を開催することが馬鹿げている。リスクは気象だけではない。

(2019 年 8 月 19 日)